

縮小社会をデザインするための 市民意向調査の基本設計 — 幸福感からのアプローチ —

谷口 宥斗¹・金 利昭²

¹正会員 日本工営株式会社 コンサルタント国内事業本部 (〒102-8539 東京都千代田区九段北 1-14-6)
E-mail: a9253@n-koei.co.jp

²正会員 茨城大学教授 工学部都市システム工学科 (〒316-8511 茨城県日立市中成沢町 4-12-1)
E-mail: toshiaki.kin.prof@vc.ibaraki.ac.jp

現在の日本は縮小社会であり、今後は現存する施設やサービスを維持することすら難しくなるため、最低限の生活サービスで最大限の幸福が得られる生活を送れるよう、個人の幸せに必要なまたは不要なサービス等を「取捨選択」していかなければならないと考えられる。本研究は、縮小社会のデザイン手法として、生活環境の取捨選択に幸福感を考慮した意向調査の枠組みを検討し、枠組みに沿った調査を設計することと、調査の可能性を把握することを目的とした。その結果、今後の社会デザインを行う上で「物的環境」「自己環境」「人的環境」のトレード・オフ関係からなる枠組みを作成した。また、作成した枠組みから、調査の基礎となる点数配分法や必要/不要な環境要素の同時選択による質問項目、Excel 形式による調査方法を設計した。

Key Words: *shrinking society, living environment, subjective well-being, social design, survey design*

1. はじめに

(1) 研究背景

社会の成長期における都市計画は、住民の必要とする施設・サービスを充実させる計画が多かった。しかし、わが国では人口減少や少子高齢化、都市部への人口流出が進行しており、地方では現存する施設やサービスを維持することすら難しくなるため、今後は必要最小限の生活サービスで最大限の幸福が得られる生活を送れるよう、住民の幸せに必要なまたは不要なサービス等を「取捨選択」していかなければならないと考えられる。縮小社会における都市計画の研究として、宇都¹⁾は、現行の社会システムの状態では財政余力がない分、インフラ維持・管理、更新に充てるか、貧弱なインフラ水準に耐えながら経済や生活レベルを確保しなければならなくなると述べた。また石川²⁾は、対応策としてコンパクトシティ建設を例に挙げ、ライフスタイルや価値観の多様化を背景とした「適度な」集中・混在を考える上では、居住者の心理的側面の考察が必要と考えた。つまり、サービス等の「取捨選択」を行う上では、ライフスタイルの傾向や生活レベルの許容範囲など、個人の価値判断の相違を考慮しなければならない。したがって、単に都市施設・サービス

やライフラインなどの「物的環境」だけではなく、家族や友人関係などの「人的環境」や仕事や余暇活動などの「自己環境」等を包括して考える必要がある。加えて、縮小社会では財政難等の問題により各種サービスが望まれる水準を満たさないため、環境を評価するためには満足度ではなく、幸福感のような人々の実感に近い考えのほうが相応しいと考えた。

一方、国や自治体などの政策が市民生活に与える影響を評価する指標として、幸福指標が注目されている。その中でも、主観的な幸福感指標は近年活発に研究されており、都市政策への導入が検討されている。我が国では、内閣府から 2017 年に「人々の幸福感・効用など、社会のゆたかさや生活の質 (QOL) を表す指標群 (ダッシュボード) の作成に向け検討を行い、政策立案への活用を目指す」(骨太方針 2017)³⁾が発表された。また、自治体レベルでも幸福指標を政策評価に導入する動きが広がっており、2012 年時点で 22 団体が地域独自の幸福指標の構築に向けて具体的な取り組みを行っている⁴⁾。また小林⁵⁾は、主観的幸福感と生活満足度がなぜ一致しないのかを検討しており、満足度は短期的、幸福感は長期的なウェル・ビーイングとして得ている異なる意識とした。他にも幸福指標を用いて、都市計画や都市環境整備を評

価する研究や調査も近年増加してきており、今後の都市を考える上で人々の幸福増進に寄与する環境を把握することは、意義があるといえる。

(2) 本研究の目的

本研究では、以下の3点を目的とする。

- ① 文献調査から、将来の社会像や都市評価、幸福指標などに関する知見を整理・把握した上で、縮小社会をデザインするために必要な知見を整理する。
- ② 既存知見の問題点や課題を踏まえて、これからの縮小社会デザインを行う上での、生活環境の取捨選択と幸福感を考慮した意向調査の枠組みを検討し、枠組みに沿った調査を設計する。
- ③ 市民意向調査を実施し、調査の可能性を把握する。

(3) 本研究の位置づけ

前述したように、縮小社会における都市に関する研究は、近年において活発に進められている。本研究でも、将来の社会をデザインすることを目的としており、浅見⁹⁾と同じく環境の取捨選択について述べるが、本研究では時間とお金を「資源」と考えて、「資源」の使いみち（都市環境や人間関係など）について点数配分法によりトレード・オフ関係を探る点と、評価方法として幸福感尺度を用いる点で新規性がある。また幸福感については、都市環境や社会との関わり、時間やお金の使い方との関係を把握する研究は存在するが、それらをまとめた社会選択と幸福感の関係を把握しようとする研究は少なく、さらに縮小社会下における環境要素の選択を、幸福感尺度で評価する研究はほとんどない。そこで、本研究では幸福指標を用いた評価と縮小社会下での取捨選択を総合し、資源が減少した都市で、最大限の幸せを感じる生活が送れるような施設・サービス、人間関係や活動等の関係に焦点を当てて研究を行うこととする。したがって、将来の都市や都市生活と意識の関係、幸福指標などについての既存知見をより詳しく調査することで、本研究への示唆を得る。

2. 既存知見からの示唆

(1) 既存研究の整理と分類

日本の人口がピークに達した 2008 年以降に執筆された、縮小社会における都市計画に関する研究や幸福指標を用いた都市評価に関する研究について、整理し分類を行った。分類方法を表-1 に示す。論文は全部で 75 本あり、分類の総数は重複を含む。

(2) 既存研究の問題点と課題

既存研究の成果としては、撤退地域の居住にディスイ

表-1 論文の分類方法

設定した論文項目	分類項目の詳細	総数
① 都市施設・サービス等の撤退・適正配置	公共施設管理 縮退 公共交通再編	(25)
② 都市のコンパクト化	施設誘導 拠点形成	(25)
③ 都市政策とその影響	経済的問題 制度環境の整備 環境問題	(27)
④ 都市構造や地域類型	集積・縮退地域 建築基準法 都市類型化	(23)
⑤ 幸福等に関する物的環境	都市施設サービス 交通 ライフライン	(22)
⑥ 幸福等に関する人的環境	人間関係 ソーシャル・キャピタル	(15)
⑦ 幸福等に関する活動やライフスタイル	移動 ライフスタイル 余暇活動	(21)
⑧ 幸福等に関する自然環境	環境汚染 緑地	(12)
⑨ その他	①～⑧以外	(7)

ンセンティブを与え、居住のリスクやデメリットを提示することで、居住地選択を集約化させる方向に選好を変容できること。また、地域の各種シナリオ提示によって住民の居住地選好を把握できることや住民の生活意向を抽出することによって、将来都市像の類型を行えること。加えて、都市政策や定住意向、生活環境・地域満足度や余暇活動、仕事やソーシャル・キャピタルと幸福度との関係を把握すること。他には、楽しみや生きがいと時間の配分による幸福度への影響を明らかにしたこと、などが挙げられる。しかし、これらの研究では、以下の問題点・課題などが存在する。

- ① ワークライフバランスと幸福度を考える上では、お金（収入）とその使いみちについても考慮する必要があると考えられるが、時間配分のみ行われている。また、階層的な配分も行われていない。
- ② 縮小社会における都市での活動や人間関係、施設・サービスを総じて評価するためには、満足度のような短期間での意識を評価する方法は適さない。
- ③ 幸福尺度を用いた研究は、現状の資本との関係を導出する研究がほとんどであり、資本が縮減した際の影響を把握しようとする研究が見受けられない。

したがって本研究では、以上の問題点・課題への対応として、個人の幸福感を維持・向上させるために必要な生活環境の要素を、「資源（時間とお金）」のトレード・オフ関係の中から選択させ、その関係をまとめて抽出するための質問項目を検討する。また、生活環境のメリットとデメリットを同時に選択させて、将来の縮小都市に必要な価値観を取捨選択させるような調査票を作成する。

そのために、社会デザインの概念図を作成し、社会をデザインするための枠組みを考察する。以上の3点を行うことにより、これまで行われてきた研究と比較して、将来の社会をより現実的な社会像として描き出せるのではないかと考えており、その概念を1つの知見とする。

3. 縮小社会デザイン

本研究における縮小社会とは、社会問題等の影響から、現状より都市環境維持などを行う上で税金負担が増加することで、個人の資源（時間とお金）の総量が減少した社会のこととする。また、今後の社会像を描出する際に必要となる考え方を「縮小社会デザイン」として、田中ら⁷⁾や功刀ら⁸⁾、松橋⁹⁾を参考に縮小社会をデザインするためのフレームを考察した。その概念図を図-1に示す。ここで、本研究では住民の幸福を維持もしくは向上させるためには、

- ① 物的環境（ハードやソフト、ライフライン整備など）
- ② 自己環境（仕事と自由時間の質や量、お金の余裕や使いみちなど）
- ③ 人的環境（家族・友人関係、地域のつながりなど）

の3つの環境(以下「生活環境」)が必要であると考えた。これらの項目が自分の考えている必要量にどの程度達しているかによって個人の幸福感が増減する。しかし、「①物的環境」「②自己環境」「③人的環境」はそれぞれトレード・オフの関係にあり、優先する環境の項目を決めた場合、その他の項目ではあまり多くを望めなくなってしまう。資源が減少する縮小社会ではさらにその関係が顕著になり、幸せを感じる生活を送るためには必要な項目と不要な項目を適切に取捨選択していかねばならないと考えられる。したがって、将来の社会をデザインするためには、

- a) 適切な資源（時間とお金）の配分とその使いみち
- b) 必要な環境の項目と不要な環境の項目
- c) 幸福度のような生活・人生を評価することのできる尺度

を導出することが必要となり、本研究では、a)-c)を導出するためのアンケート調査を行うこととする。

4. 市民意向調査

(1) 調査の設計

本研究で行うアンケート調査は、考察した社会デザインの枠組みに従っており、表-2に示す6部から構成される。本研究で新規に考案した調査項目はD-F章で、D章は大きく2つに分かれており、①「資源（時間とお金）」の持ち点を100点としたときの、他人と過ごす時間や都市環境の充実にあてるお金（税金）、また余暇活動費や施

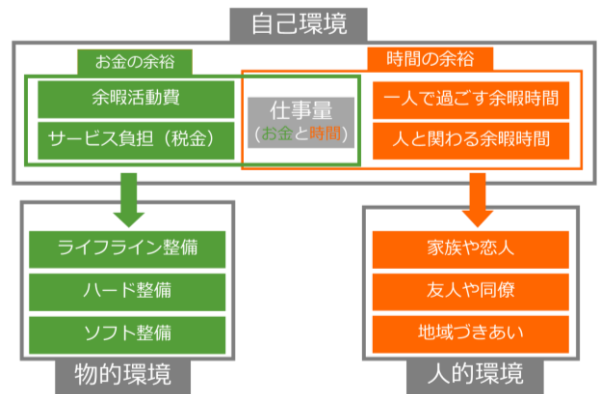


図-1 社会デザインの枠組み

表-2 アンケート調査票の6部構成

	質問項目
A. 基本属性	性別, 年齢, 出身地など
B. 生活や人生についての評価	健康状態, 都市満足度, SWLS (人生満足度) など
C. 現状の都市環境とライフスタイル	都市の満足度や重要度, 余暇活動費などへの満足度等
D. 資源(時間とお金)のバランスとその使い方	理想と縮小都市における時間とお金, 環境等への配点
E. 幸せな生活を送るための要素	決められた範囲での配点 ライフライン, 物的環境, 人的環境, 自己環境
F. 生活や人生における価値観	生活や人生における必要/不要な考え方の取捨選択 (40 項目)

設・サービスなどへの持ち点の理想の配分。②将来の縮小した社会において、「資源（時間とお金）」の総量が減少し、持ち点が80点になった際の点数配分を行わせる形式とした(図-2)。さらにD章では、持ち点が100点のときの幸福度を100としたときの、持ち点が80点に下がったときの幸福度についても回答を求めた。またE章は、生活環境の10項目とライフラインの5項目について、「1点：不要である」「5点：必要である」の5段階から50点以下になるように選択してもらう条件を設定して回答してもらい、取捨選択を行う形式とした(図-3)。F章は、生活環境の小項目を40項目作成し、必要な考え方と不要な考え方を同時に選択してもらう形式とした。加えて、本調査では幸福感尺度にSWLS(人生満足尺度)の日本語版¹⁰⁾を用いることとする。

以上の設計に従って、Excel形式でアンケート調査票を作成し、パソコン上で入力してもらう方式とした。その理由として、D章の点数配分法による資源の重視度の点数付けやE章の制約下での環境要素の選択、F章のメリット・デメリットの取捨選択の項目では、計算などが非常に面倒であり紙媒体での回答が困難なためである。そこで、アンケート票を自動計算が瞬時に行えるExcelにて作成し、パソコン上で入力してもらう方式とした。本方式を用いることで、今までは煩雑な作業を伴うため収集できなかったデータを、Excel形式で配布・回収するこ

D-5 将来の都市での生活において、
 時間に余裕があることとお金に余裕があることのどちらを重視しますか。
 資源（時間とお金）を示す持ち点を80点としたときの配点をそれぞれ数字でお答えください。
 ただし、持ち点はすべて配分して合計80点になるようにしてください。

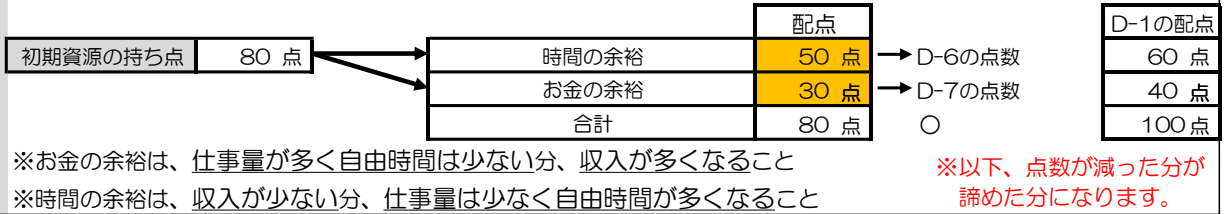


図-2 D章の資源配分のアンケート形式（抜粋）

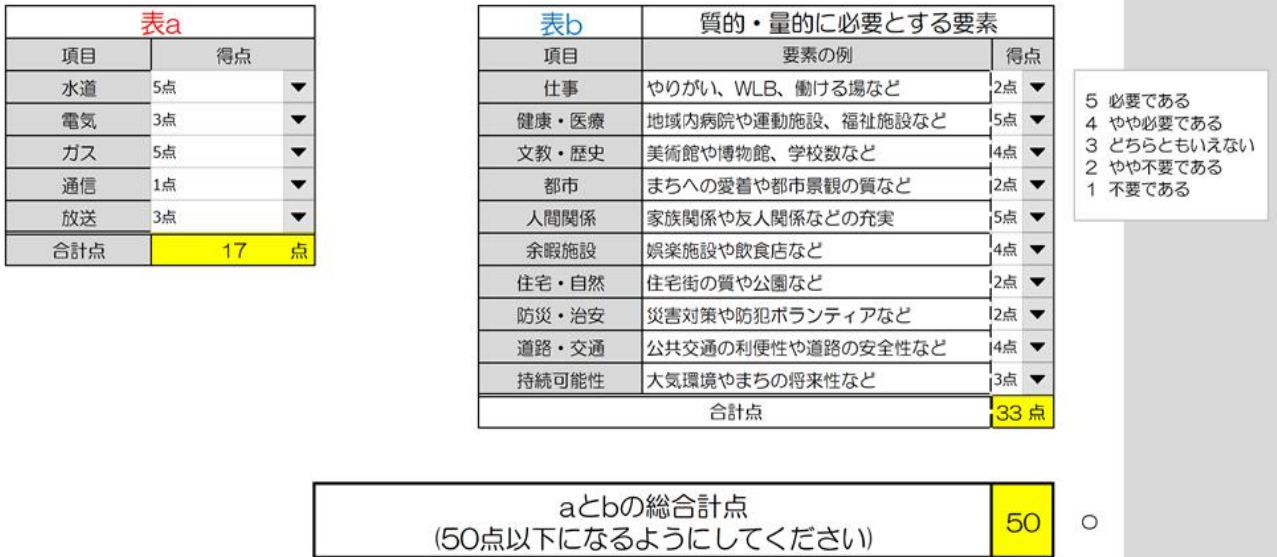


図-3 E章の取捨選択のアンケート形式（抜粋）

とにより可能とした。

(2) 意向調査の実施

アンケートの実施概要を表-3に示す。茨城大学の学生を対象にアンケート調査票を配信した。配信は Excel ファイルをメールに添付して行い、回収はメールか共有フォルダへのアップロード、または印刷したアンケート票を回収ボックスに投函する3つの方法を提示して回収とした。また、回答者には謝礼として500円分の図書カードを進呈する予定だったが、回答者が集まらなかったため、謝礼を1000円に増額して協力をお願いした。その結果、回収されたサンプルは79部だった（配信部数はメールでの一斉送信であるため、回収率とともに不明）。

表-3 アンケート実施概要

調査対象者	茨城大学に所属する学生および茨城大学大学院に所属する学生
配信日時	2020年1月10日（金）16:00
回収締切	2020年1月17日（金）23:59
配信物	・アンケートご協力のお願い ・「幸せを感じる都市環境に関するアンケート」調査票（Excel形式7シート）
配信方法	・メールによる配信 ・Google Drive上の共有フォルダ
回収方法	・メールでの返送回収 ・One Drive上の共有フォルダで回収 ・アンケート集計ボックスによる回収
回収部数	79部（回答者には1000円分の図書カードを進呈）

(3) 集計結果

図-4より、回答者の40%程度のSWLS得点が19点以下となり、50%程度が21点以上となった。また、平均点は19.9点であり、過去の調査では、日本の大学生は20点程度となる結果が出ていることから、正しく回答されたといえる。D章の資源（時間とお金）の配分の結果を、図-5,6に示す。ここでは、お金への配点を極端に高くする回答者がみられた。また、理想の資源配分（資源の持

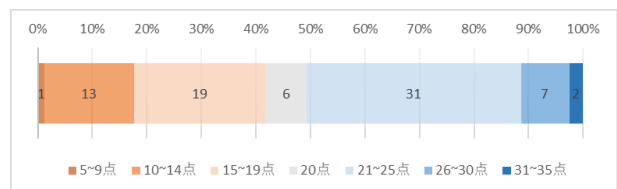


図-4 SWLS（人生満足度）得点

ち点が100点分の時）の幸福度を100点としたときの、縮小都市（資源の持ち点が80点）における幸福度は、図-7に示すように、持ち点が80点になった場合でも、幸福度の点数が80点を超過している人が3割程度となった。

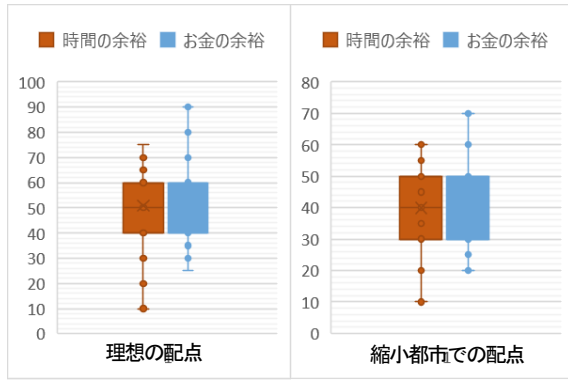


図-5.6 理想の配点と縮小都市での配点

このことから、縮小社会においても、自分の意向が反映された生活を送れた場合、幸福度をあまり下げずに生活できる人が一定数いることを確認できた。反対に、80点より低くなる人も3割程度だったため、縮小社会においては①幸福度が著しく低下するグループと、②幸福度があまり低下しない2グループの存在が示唆される。E章の幸せを感じる生活を送るために必要な要素では、図-8に示すように「仕事」や「健康・医療」、「人間関係」に関する項目の点数が高くなった。この結果から、健康や人間関係、仕事などの「自己環境」が整うことが幸せな生活を送るためには必要であると考えられる。

(4) 幸福度による分析

縮小都市での幸福度に影響を与える要因を探るためにクロス集計を行い、カイ二乗検定により有差検定を行った。その結果、図-9より縮小都市での幸福度が高くなる回答者は、幸福度が低くなる人よりも生活環境の充実にかかる税金を負担する配点を低くする傾向があることが分かった(5%有意)。都市環境の充実を重視する人は、現状の環境を維持するために負担が増えることに対して、幸せを感じられなくなると考えていると推察する。また、図-10より縮小都市での幸福度が高くなる回答者は、幸福度が低くなる人よりも近隣店舗を必要とする人が多いことが分かった(5%有意)。このことから、インターネットショッピングや生協などの宅配サービスなどで買い物を行うだけでなく、近隣の店舗の存在も幸せな生活を送る上では必要だと考えられる。

5. 調査手法の考察

集計結果から、本調査への理解度が比較的高いことを把握することができたため(図-11)、そのほかに示した集計結果と合わせて新規の知見が得られたと考えている。中でも、Excel形式でアンケート調査票を作成し、PC上で回答を求める方式から理想の都市と縮小社会下との環境要素の配分を比較することを可能にしたこと。また今後の生活や人生において不要な価値観を抽出すること

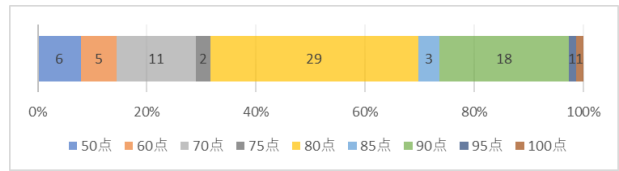


図-7 縮小都市における幸福度

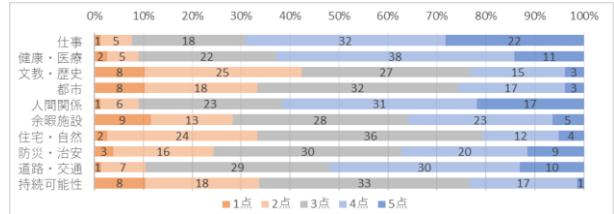


図-8 幸せを感じる生活に必要な要素

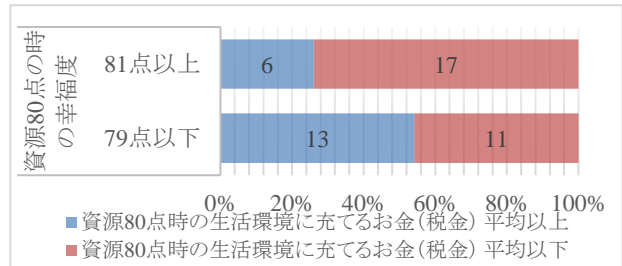


図-9 資源80点の時の幸福度と税金への配点

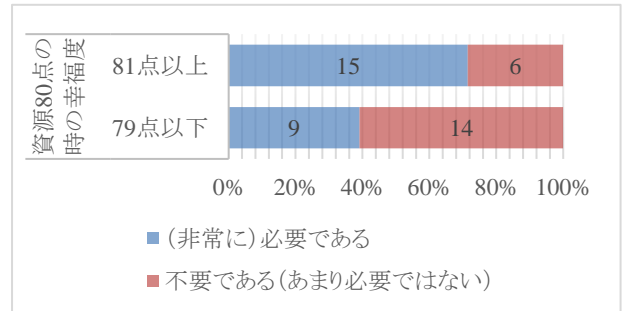


図-10 資源80点の時の幸福度と近隣店舗の必要性

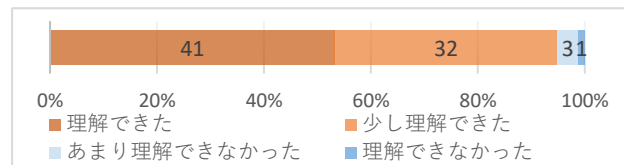


図-11 アンケート調査の理解度

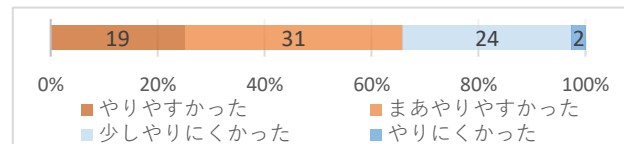


図-12 アンケート調査の回答しやすさ

ができる点で有用だといえる。しかし、今回の調査は回答方法がやや難しく(図-12)、謝礼を増額したにも関わらず調査票を少数しか回収できなかったことや、サンプル不足により分析が不十分になってしまったこと、学生のみを対象としたため、サンプルに偏りがあることなど

が今後の検討課題である。

6. 結論

以上より得られた本研究の結論を以下に示す。

- 1) 文献調査を行い、縮小社会における都市計画や、幸福指標を用いた都市評価に関する研究等を整理した結果、縮小社会における時間やお金などの資源の配分についての知見や、環境の取捨選択を行う上で、切り捨てなければならない要素の明示やデメリットの提示と幸福感などの市民意識とのかかわりに関する知見が不十分であった。
- 2) 既存知見の問題点や課題から、縮小社会のあり方を検討し、これからの社会デザインを行う上で「物的環境」「自己環境」「人的環境」のトレード・オフ関係からなる基本的枠組みを作成した。またこの枠組みに基づいて、調査の基礎となる点数配分法と必要・不要な環境要素の同時選択式による質問項目、Excel 形式による調査方法を設計した。加えて、資源（時間とお金）の総量を、理想の配分では持ち点 100 点に、また縮小都市では持ち点を 80 点に設定することで「縮小」を表現した。
- 3) 設計した市民意向調査を実施した結果、縮小社会においても個人の価値観を考慮した適切な資源配分を行うことで、幸福度があまり下がらないグループが存在することや、トレード・オフ関係の中で重視する項目を選択させる設問では、「物的環境」よりも「仕事」や「人間関係」などの「自己環境」を重視する人が多いなどの知見を得た。

参考文献

- 1) 内閣府 政策統括官：「満足度・生活の質に関する調査」に関する第 1 次報告書，令和元年5月24日
- 2) 幸せ経済社会研究所：「自治体の幸福度や（真の）豊かさ等の指標化や政策目標への考慮状況に関する調査」報告，2012年9月
- 3) 宇都正哲：人口減少下におけるインフラ整備を考える視点，日本不動産学会誌，第25巻第4号，2012.3
- 4) 石川ら：住宅地における用途の混在と性能規制に対する居住者の心理的評価に関する研究，都市住宅学，第95号，2016，AUTUMN
- 5) 小林盾，カローラ・ホメリヒ，見田朱子：なぜ幸福と満足は一致しないのか —社会意識への合理的選択アプローチ—，成蹊大学文学部紀要 第50巻（2015）
- 6) 浅見泰司：都市計画からみた不動産学への期待：根拠に基づく計画に向けて，日本不動産学会誌/100号記念特集「不動産学の新しい課題—今後の100号を予想する」，第26巻第1号，2012.6
- 7) 田中ら：居住地域の特性が住民の主観的幸福度に与える影響，農村計画学会誌，32巻論文特集号，2013年11月
- 8) 功刀ら：主観的幸福感と自然資本 —マイクロデータを用いた分析—，環境科学学会誌30(2)，96-106(2017)
- 9) 松橋啓介：社会の持続可能性と個人の幸福，国環研ニュース，34巻，5号，2015
- 10) 大石繁宏：幸せを科学する -心理学からわかったこと-，新曜社，2009年

(2019.3.8 受付)

BASIC DESIGN OF A CIVIC INTENTION INVESTIGATION TO DESIGN A SHRINKING SOCIETY - APPROACH FROM A SENSE OF WELL-BEING -

Yuto TANIGUCHI and Toshiaki KIN

Today, Japan is a shrinking society, and it will be difficult to maintain existing facilities and services in the future. Accordingly, it is assumed that it is necessary to "sift through" the urban services, analyze they are necessary or not for individual happiness, so that we can live in the maximum happiness with the minimum necessary urban services. Therefore, as a design method for a reduced society, the purpose of this study is to examine a framework for an intention survey that takes happiness into account when choosing a living environment and design a survey in accordance with the framework. As a result, a framework consisting of the trade-off relationship of "physical environment", "self-environment" and "human environment" was created in the future social design.